

現代短歌アンソロジー

〈帽子〉 三十首

佐藤弓生 「かばん」

Yumio Saito



帽子が出てくる短歌といえば、まずは寺山修司の〈海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり〉(『空には本』)、あるいは俵万智の〈思い出の一つのようそのままにしておく麦わら帽子のへこみ〉(『サラダ記念日』)を思い出す方が多いだろう。夏の体験をとまなう麦わら帽子は、郷愁と抒情を呼びおこす点で、短歌向きの素材と言いつけるくらいだ。

次ページ冒頭の歌における麦わら帽子は、具体物を超えて、失った美しいものの象徴となっている。帽子のデザインは西洋由来のものであり、それ以前の日本でのかぶりものといえば、笠。鉄幹は若いひじり(僧)のいでたちにロマンを見、子規は旅人の行為をリアルにとらえる。明治末期の牧水と啄木の歌からは、服装の西洋化が広まり男性の帽子姿が一般的になってきていたことがうかがわれる。〈ちさき帽〉は、その陰に個人の大きな志を秘めているようでもあり、かたや〈帽なき男〉という表現は都市生活者の匿名性とも通じる。戦後、しだいに男性が社会生活において帽子を常用しなくなるにつれ、そのイメージは玉城作品や小池作品に見られる幻想性へと溶解してゆくかに思われる。

ゆえに帽子の記号性(職務や立場など)はかえって、よりはつきり意識されてくるようだ。とりわけベレー帽は印象的だろう。ヘルメットはここでは学生運動を示す記号だが、岸上作品から三十年を経て詠まれた梅内作品では、その意味は変質している。

岡井作品に出てくる二種類の帽子が、外部に向けて二人の人格を表明するものでもある一方で、小島・東作品に見られる子ども帽子、河野・横山作品の大人の帽子も、身体を守り、ときには表情を隠すためにも機能する、いわば内向きの人間関係にまつわるアイテムといえよう。三井・井辻・松野作品の帽子は、むしろ人間関係に寄りかかりすぎず、単独で行動する人のためにある。帽子はその形状ゆえ、ひとり考える人、思索者にふさわしい。他者との距離感を生むものでもある。



戦争に失ひしもののひとつにてりボンの長き麦藁帽子

尾崎左永子「さるびあ街」

窓べには仙人掌の花日覆のんだら縞やわが夏帽子

齋藤 史「魚歌」

蘭を手に麻のまごろも竹の笠わかきひじりを紀の山に見る

与謝野鉄幹「紫」

旅行くと都路さかり市川の笠売る家に笠もとめ著つ

正岡子規「竹の里歌」

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔

北原白秋「桐の花」

打ち水や かんかん帽の白秋が阿蘭陀書房より出でてくる

永井陽子「モーツァルトの電話帳」

黒毛帽金糸の紐に頤くくるわかき近衛に物言ひてまし

与謝野晶子「夏より秋へ」

わがちさき帽のうへより溢れ来る秋のひかりに血は安からず

若山牧水「別離」

夜おそく停車場に入り／立ち坐り／やがて出でゆきぬ帽なき男

石川啄木「一握の砂」

夕ぐれといふはあたかもおびただしき帽子空中を漂ふごとし

玉城 徹「樛木」

子の口腔にウエハス溶かれあは雪は父の黒き帽子うすらよごしぬ

小池 光「バルサの翼」

シグナルのランプの中に描かれて帽子の紳士どこへも行けぬ

近藤かすみ「雲ヶ畑まで」

啄木祭のビラ貼りに来し女子大生の古きベレーに黒髪あまる

寺山修司「われに五月を」

ゆうぐれの電柱太し ベレー帽の少年探偵裏に隠して

笹 公人「念力図鑑」

ヘルメットついにとらざりし列のまえ屈辱ならぬ黙禱の位置

岸上大作「意志表示」



中核派のヘルメット問えばやさしげに「決まりだから」と被りているも

梅内美華子『横断歩道』

ベレエ帽かむり直して礼をせり鳥打ち古りてわれは従ふ

岡井 隆『歳月の贈物』

この夏の心を予約するように贈られている麦わら帽子

俵 万智『かぜのてのひら』

宿酔をおさえんとして目瞑れば毛糸の帽子わずかに傾ぐ

田中 濯『地球光』

市役所に飾られている忘れ物七月になり帽子は減りぬ

藤島秀憲『二丁目通信』

みどりごはまだわれのもの 風の日の外出にあかき帽子をかぶす

小島ゆかり『水陽炎』

ははそはの母の話にまじる蟬 帽子のゴムをかむのはおよし

東 直子『春原さんのリコーダー』

夏帽子すこしななめにかぶりゐてうつ向くときに眉は長かり

河野裕子『森のやうに獣のやうに』

逢ひし日とおなじ帽子を深くかぶり君ゐねば鋭き夏を過せり

横山未来子『樹下のひとりの眠りのために』

あたらしき帽子にピンを刺しながら鏡の中のわれは去りゆく

三井ゆき『能登往還』

花をかざつた帽子とスーツケースだけ私は地球に腰かけてゐる

井辻朱美『水晶散歩』

葡萄酒の帽子を被る朝この空から何が降りそそごとうと

松野志保『Too Young To Die』

フロイトがいつも帽子で捉えたるヤマドリタケのおおいなる傘

永田和宏『風位』

単独者とはいかなる毒か帽深く被れる者はふりむかぬなり

渡辺松男『寒気氾濫』

毛糸帽のわれ転生を願はねど森で木の実の時雨に出会ふ

米川千嘉子『あやはべる』